
リ・ライフ～天獄と14人の自殺者達～

キセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リ・ライフ〜天獄と14人の自殺者達〜

【Nコード】

N1653Y

【作者名】

キセル

【あらすじ】

自殺した者は天国にも地獄にも行けない。

その行き着く先となる天獄という檻に捕われた性別も年齢も様々な14人の自殺者達。

各自殺者達に己の自殺に仕様した道具が配分された中、彼等14人は強制的な共同生活を強いられる。

共同生活はルールに反しない限り、何をしても自由であり、最後の一人となった者は望みを叶えた上でこの天獄から解放される。

” 生き返り ” を賭けたり・ライフゲームが今始まる。

《共同生活のルール》（前書き）

《小説閲覧前の注意点》

- ・この小説には残酷な表現や性的にキツイ表現があります。
- ・御都合展開はなるべく無いようにしますが出てくるかも知れません。
- ・作者が未熟なのでルールや設定に矛盾や穴が出てくる可能性もあります。
- ・作者が未熟なので誤字、脱字が目立つかもしれませんが適度に脳内補完して下さい。
- ・注意点がまた増えるかもしれません。

以上の事がオツケーという方のみ、読み進めて下さい。

《共同生活のルール》

うけけっ！はい、全知全能たる神様から貰った命をわざわざ自分で捨てたクズの皆々様注目うッ！！

ようこそ…てんごくへ！！

最初に言っておくけど天国じゃないよ天獄さ。

君達は知ってるかい、自殺した人間ってのは天国にも地獄にも行けないんだよ。

だからここは天国でも地獄でも無い、天獄。

だから僕は天の使いである天使でも地獄の鬼でも無い、天鬼です。うけけっ！なのでここには天国のような心地好い暮らしも地獄のような苦行も一切存在致しません、良かったね、自殺なんて一番の大罪とも言われてるのに。

まあ言葉を変えればこの空間には何も無いって事だけだね。

君達14人にはそんなこの空間での共同生活を楽しんで貰おうと思います。

君達は既に死んじゃってるので食事は必要ありません、共同生活の時間は無制限です。

一応共同生活でのルールがあるので良く覚えて下さい。

壱・天獄は自殺した者がその記憶を持ったまま辿り着きます、したがって天獄にいる者は全員自殺した事のある者です。

弐・その際、自殺に使用した道具と身につけていた物が配布されます、道具の使用方法に関しては各自自由です。

参・この空間に昼や夜、つまり時間の概念はありません、だから共同生活は時間無制限です。

氏・食事は必要ありません、飢えて倒れる事も、もちろん死ぬ事はありませんが睡眠は必要です、睡眠は各自、自分の部屋と独房以外では禁止です。

呉・天鬼ちゃんはナビゲーター兼アイドルなので天鬼ちゃんへの攻撃行為は禁止です。

録・時折天鬼ちゃんマジ天鬼からのプレゼントがあります、どう使うかは自由です。

七・不純異性行為、つまり性行為は両者の合意、レイプのどちらも禁じます、合意の場合はどちらも、レイプの場合は加害者が処罰の対象です、性行為の基準は天鬼ちゃん基準です。

弐・独房の使用は自由ですが鍵は共通の物として必ず指定の場所に戻して下さい、個人による管理は禁止します。

Q・この空間を調べる事は自由ですが決められた立入禁止の場所に入るのは禁止です。

獣・共同生活の中で殺された場合、それは成仏扱いとなります。

銃市・全員成仏し、最後の一人となった者は願い事を一つ叶えた上で生き返る事が出来ます。

12・共同生活をする上でルールは絶対でありマス。

十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仏して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしても自由です。

じゅうよん・《

》

うけけっ!!!!では、ルールをしっかりと守って楽しい共生
活を送りましょう!!!

《共同生活のルール》（後書き）

と、いう訳で始めました、リ・ライフ／＼天獄と14人の自殺者達、作者のキセルです。

ヴァイスさん、タイトル名の提供ありがとうございます！！

自分はシークレットゲームというゼロサムゲーム物の二次創作をメインで書いてましたが書いてるうちにオリジナルのゼロサムゲーム物を一本作ってみたくなったので本小説をスタートさせました。始まりから終わりまでの大まかな流れは決まっていますので最後まで付き合って貰えたら嬉しいです。

また、シークレットゲームの小説の方も同時にちよくちよく更新して行きたいのでそちらの方もご贖して貰えたら嬉しいです。

ブローグへ終わり、始まる

たいした理由は無かった。

別段、人生に疲れたとか恋人が死んでその後を追う為とかそんな理由はない。

仕事も決して順調とは言えたものでは無いにしろ、職場の人間関係も悪くなかった。

もちろん結婚なんてものもしてないし両親の手からは既に離れているので俗に言う家庭の事情ってやつでも無い。

それでも…俺、はるか遼 かなた彼方は気が付けばナイフで手首をかつ斬っていた。

ああ、ちなみにこの苗字と名前はコンプレックスと言えたが親父がはるか遼 たいち大地、妹がはるか遼 うみえ海恵というふざけた家系のもの（母親ははるか遼 はるか春香というある意味でもっとも残念）なので別段気にはしていない。

だから俺にはわからなかった。

自分が何故、自殺したのか、その明確な理由が。

何か…、何かあったはずだ。

答えを出そうと頭を使おうとするがどうにも働かない。

当然だ、今も俺の手首からはドクドクと血が流れている。

動脈…イツたかな？

痛みに叫ぶ事になるだろうと思って事前にテレビをつけておいたが
そこまで必要では無かった。

今もニュース番組で連続猟奇殺人犯が自殺したニュースをやっているがその中身は俺の耳には通っていない。

痛みはそれ程でも無かったがどうしようも無い虚無感に襲われていた、

出血多量により血が足りないのだろう。

視界がぼやけていく…。

ああ、もう良いや、考えるのは。

流れに身を任せようと目を閉じる。

切った瞬間は激しく鼓動していた心臓も穏やかで静かなものになっていた

トクンツ…トクンツ

トク…ンツ。

ドクン…ドクンッ

どれだけ時間がたっただろうか？

心臓の鼓動が止まらない事に俺は違和感を覚えた。

それどころかさきほどまでぼんやりとしていた頭が今は覚醒している。

こうやって思考する事が出来るのが何よりの証拠だ。

これは明らかな異常だ。

目を開けるのが怖かったが今のこの状況を知る為にはまず、それが
必要だ。

ゆっくりと目を開ける、まぶたはすんなりと上へと上がり。

「ッ…！」

俺は驚愕した。

そこが”今まで自分が見た事の無い場所”だったからだ。

見慣れたボロアパートの自室から一変、目に映るのは身に覚えの無い部屋。

「どこだ…ここは？」

当然の疑問だがそれに対する答えが出るはずが無い。

目覚めた俺の身体はベッドの上に寝かされている形だった。

決して高級品とは言えない代物ではあるが自室であるボロアパートの煎餅布団よりは寝心地が良い。

俺はとりあえず起き上がるとベッドに腰をかけて部屋を見渡す。

とくに注目すべき家具も置かれていない殺風景な洋風の部屋。

どこかの殺人事件が起こりそうな洋館の一部屋という印象だった。

あるのはベッドと机、それと最早映る事の無いアナログテレビ。

ドアがあるので出られる事は出られるだろうが…、とりあえずは状況の整理が先決だ。

「病院…な訳無いよな」

俺の自殺…厳密には俺は今生きてるから自殺未遂になるが、に気付

いた誰かが救急車を呼んで俺を病院まで運んだ。

そんな事はこの現状を見れば推理するまでも無く、間違いだとわかる。

「……………」

俺の右手。

そのリストカットした部分を意図的に見ないようにしながら手を握ったり開いたりしてみる。

ぐっ、ぱっ何事も無く正常に動く、…いや、動いてしまった。

恐る恐るその箇所を薄目で、目を配らせてみる。

「嘘…だろ？」

傷が消えていた。

あれ程流れていた多量の血も消え去り、普通の、代わり映えの無い自分の腕が見える。

「…なんだってんだ」

状況が掴めずに落胆する。

ふとポケットに何か入っている事に気付き、すぐにそれが何かわかった。

「…タバコか」

箱に入ったタバコと100円ライター、タバコは七本入っていた。

そついや…持ったままだったか。

そのうちの一本を抜き取り、口にくわえるとライターで火をつけ、一服をする。

タバコの本数を考えると少し勿体ないかと思ったが何より一度、気持ちを落ち着かせたかった。

「ふうっ…」

肺に入れた煙を吹き出す。

暇つぶしにアナログテレビをつけようかと思ったがリモコンも本体の電源スイッチも見当たらない。

落ち着いて今の状況を整理してみよう。

俺は自殺の為に右手首をナイフでかつ切った。

それは間違いないが…、その傷はすでに存在せず、俺の身体はどこかもわからぬ場所に移されていた。

ここが病院で無い事は明らかだが、拉致されて来た…と説明する決定的なものも無い。

自殺者を一つの島に送る。

以前、そんな漫画を見たことがあったのでその可能性が脳裏を過ぎる。

…アホくさい、と頭を振って、フィクションと現実を混同しないようにした。

「現実…か」

言葉に出して改めて考える。

ここはもしかしたら…死後、天国とか地獄とか、そんなレベルの場所なのではないか？

当たり前だが死んだ後の世界を見た者等居ない。

小説や漫画によく書かれている死後の世界だってしょせん、イメージや空想で作られたものだ。

「ただ…」

ここが死後の世界ならば…間違い無く地獄だ。

俺が天国に行けるはずが無い。

「やっぱ…部屋から出るしかないか」

タバコを床でもみ消し、重い腰を上げてようやく立ち上がる。

…そういえば、机はまだ調べてなかったな。

「…なっ!!」

視線を机に向け、俺の身体はまた硬直した。

机の上に置かれたそれを手に取り、まじまじと見つめる。

「何で…こんな物が」

ギリリとした刃に俺の顔が写る。

思い出すのは先程の自分の姿。

ナイフで自分の右手首を切るその姿。

そして…今俺が握りしめているそれはナイフ。

俺が自殺に使った物よりも刃渡りが長く、鋭い。

形こそ違うが、ナイフで自殺し、気付いた場所に置かれていた物もナイフ。

ゾクゾクと妙な寒気がした。

ブウンッ

「!？」

その時、ずっと沈黙していた背後のアナログテレビのスイッチが入った。

「…おいおい」

テレビ画面に映ったのは…”見た事の無い生物”だった。

天使のような翼に悪魔のような身体。

悪魔のような角に天使のような輪っか。

「…はあ？」

天使とも悪魔とも見えるその生物を見た瞬間、俺は冷めた。

謎生物のどこぞのバラエティ番組の企画のマスコットキャラのようなその出で立ちにだ。

『うけけけっ！』

画面の中の謎生物は男とも女とも取れないような甲高い声を上げる。

『ようこそ、命を捨てた皆様、皆様は一度、自分でその命を捨てました、つまりこれって命がいらなんて事ですよねえ』

画面の中の謎生物は一方的にこちらに向けて言葉をかけてくる。

謎生物の言う、自分で命を捨てた、という言葉は間違いなく自殺した事を示している。

『うけけけっ！！なので今君達に与えられた命をどう使おうが僕の勝手です』

「こいつ…何勝手に」命を…使う？

こいつは何を言っている？

『これより説明会を開催します、皆様は大広間へとお集まり下さい』

「…説明があるのか？」

今のこの状況に対しての説明ならば俺としても断る理由はない。

…が、ノリがいよいよどこぞのバラエティー番組じみている。

『説明会の前にルールを一つ与えます、良いですかあ？聞き漏らさないで下さいよ、一度しか言わないですよお？』

画面の中の謎生物が勿体振るようにクルクルと回りだす。

状況が掴めない俺はただイライラとした。

『十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仏して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしても自由です』

「…は？」

『うけけけけっ！それでは！説明会でまた会おうね！』

「なっ！ちよっと待てよ！！」

ブツンッ…

俺の言葉に耳を貸すつもりも無いのか、アナログテレビは役目を果たるように電源を切り落とし、再び動かなくなった。

「上記のルールって…肝心のルールが全然わかんねえんだけど」

一方的に話し掛けられ、会話を終えられたので置いてけぼりにされた感がある。

それに出て来た単語がいくつか引っ掛かる。

ルール、禁止部分、成仏。

そして何をして良いという言葉。

「…十三？」

謎生物は確かにそう言っていた。

つまりこれは13番目のルールと言う事を考えられる。

そしてこちらに向けて呼び掛ける時に発した”皆様”という呼び方。

ルールを一人に一つずつ与え、俺は13番目、と考えればしっくりと来る。

「他にも…誰か居るのか？」

自分以外にも誰かが居るという安心感に多少心が落ち着く。

だがそれは同時に得体の知れない誰かが居るといふ恐怖も生まれる。

「くそ」

気持ちを落ち着かせようと再びタバコを抜き取り、口に加え。

「……………」

…止めた。

この先、どれだけ長い間ここに居るかわからない。

別段、ヘビースモーカーという訳では無いがちょっとは温存しておいた方が良さだろう。

「行くか」

ナイフは一応、持っていた方が良さだろうと思い、服に隠しておく。

ドアに手をかけて、そういえばと手を止めた。

「鍵…無いんだな」

特に置いておく物も無いので今はそれで良いが…。

考えないようにしても”これから”について考えてしまう。

言いようの無い不安が俺を包み込んでいた。

ブローグへ幼なじみ

バタンツ

部屋を出るとそこには薄暗い通路が広がっていた。

改めて自分の居た部屋のドアを見るとご丁寧にも『No.13《遠彼方》』とネームプレートがかけられている。

「…マジか」

まるで招待されたかのような状況に疑問は部屋に居た時よりも更に広がる。

パツと見て自分以外の人間が居るようには見えないが…それは単に通路が薄暗く、奥の方が見えないからだろう。

キュルキュルキュル…。

「…何だ？」

だが…変わりに聞こえてくる車輪を回す音。

バイクや車の類では無い事はゆっくりとした車輪が回る音でわかる。

…だとしたらこの音の正体は何だ？

音の正体を確かめる為に、ゆっくりとその先へ向かう。

慎重に…、服に隠したナイフをいつでも取り出せるようにしながら暗がりの中を進み。

そしてその正体を見た。

「　　ッ！！」

俺はその”正体”を見た瞬間数秒間固まり。

…ここが《天国》だと確信した。

車椅子に座り込んだその”正体”は。

「詩織…、柏瀬かしわせ 詩織しおり？」

「…ひゃうっ？」

相手は声をかけられた事が…、いや、名前を呼ばれた事がよっぽど意外だったのだろう間抜けな声を上げた。

「詩織！やっぱり詩織なのか！！」

俺は詩織に近付くとその存在を確かめるように身体を掴む。

柏瀬 詩織は…俺の幼なじみだ。

本来ならば…二度と会はずの無い幼なじみ、なぜなら。

「昔のまんまだ…何で？どうなってる！？」

彼女は…本来なら三年前に”既に他界している”。

その彼女が…”他界した時のままの身体”でそこにいるのだ

なので今、目の前にいる詩織の存在が信じられず、その身体にベタベタと触る。

キュルルッ

「おわつとー!!」

だがそれは詩織が突然車椅子を後ろに引いて後退させた事でストッブさせられた。

「かなちゃ、…彼方？」

遠い昔の呼び方をしようとした詩織は言葉を一度詰まらせ、俺を名前で呼ぶ。

「…わかるのか？」

「何となく…面影は残ってたから、何でここに？」

「それはこっちの台詞…、いや」

詩織がここに居る事で一つ、確信出来た事。

ここが死後の世界だというのは確実だった。

その事を詩織にも伝えようとした時。

ガチャッ

詩織の背後で扉が開いた。

「…誰？」

現れたのは…今度は知らない女だった。

見た目的な年齢は詩織と対して変わらないであろう、女子高生くらいの少女。

「あっ…未娘さん」

詩織は面識があるらしく、その女性の名前を呼ぶ。

「…あんたは？」

知らない人物の登場に俺は少なからず、警戒をした。

「人に名前を尋ねる時はまず自分からじゃない？ 遼 彼方さん」

「なんで俺の名前を…、詩織から聞いたのか？」

視線を詩織に見せるが彼女は黙って首を横に振った。

「変に警戒心を持たれるのは心外ね、私はただネームプレートを見ただけよ」

女は腕を組んで冷静な口調でそう答えてくれる。

「なるほどな…、んで、改めて聞くがお前は？」

扉に掲げられたネームプレートにはそれぞれ、確かに名前がついている。

なので”とりあえず”は女の言う事を信じる事にした。

「おりかさ織笠 みこ未娘…」

少女は静かな口調で自分の名前を告げる。

「それで…二人は知り合いみたいだけど、ここがどこだか知ってる？」

織笠の言葉を聞くと彼女も境遇は俺達と変わらないのだろう。

「さあ…？俺も今、気付いたらこの場所に居た」

「そう…、二人は兄妹…という訳には似てないし」

「だ…誰がこんな奴ときょうだ」

「単なる幼なじみだよ」

織笠は俺と詩織の関係が気になるのか、口を挟もうとする詩織より先に俺はそう告げる。

「幼なじみ…？随分と歳が違っけど」

そりゃそうだ、詩織は女子高生、対する俺は二十歳になる。

いや…詩織が生きていれば俺と同じ歳なんだろうが。

「ちょっと待てよ、そっちはっか質問してるが俺からの質問も答えて貰うぞ」

俺はこの状況を整理する為の最大の問いをこの女にしてみる事にした。

「…どうぞ」

「…ここに来る前、最後の記憶を覚えているか？」

…俺と詩織には共通点がある。

それは幼なじみという単なる括りでは無く、もっと具体的な物で、だ。

「……………」

「もしかして…けどな、お前は…」

だんまりを決め込む織笠に俺はその答えを先に言おうとした。

「…自殺したら、気付いたらここに居た」

「ッ……………」

…やはり、同じだ。

俺は当然として…だが、詩織の死も自殺だったのだから。

「…それじゃあ、あなた達も？」

「ああ、俺も詩織もじさ」

ドゴッ

「ぶべっ!!」

言いかけた俺の身体めがけて詩織が車椅子事猛スピードで突っ込んできた。

「痛…、何しやがる!!」

こんな状況でもしつかりと機能している痛覚に恨みながら俺は詩織を睨み付けた。

「……………」

だが俺の怒りは一瞬で片隅の方へと追いやられる。

「…死ね」

詩織は目に涙を溜め、呪いを込めた目で俺を睨みつけていた。

…そうだ。

目の前の車椅子の少女が俺を憎んでいないはずがない。

なんせ今目の前に居る男は幼なじみ…兼。

自殺の原因を作った張本人なのだから。

「…すまん」

謝ってどうにかなるものでも無く、それでも出来る事と言えば頭を下げ、そう呟く事くらいだった。

「…何について？」

「何につて…そりゃ」

…決まっているだろ。

俺は言葉を続けようとするが…。

「…いい加減に本題に戻って良い？」

痺れを切らしたのか、織笠がその場の空気を最初のものに戻した。

「…あ、ああ」

心の中で感謝しつつ、俺は”本題”について考える。

ここでの本題というのは当然、俺達三人の共通点だ。

「さっき言いかけてたけど、あなた達二人も自殺した…という事で間違い無いのね？」

「ああ…間違い無い」

背後で睨む詩織の気配に冷や汗をかきつつ、俺は答える。

「一緒の所を見ると…二人は心中でもしたの？」

「だ…誰がこいつとなんか」

「詩織は三年前だ、葬式には俺も行ってる」

「ふうん…そんな時”だけ”は来たんだ」

棘のある言い方だが俺に反論の権利は無い。

「それが本当なら…私達の共通点は死…、それも自殺って事か」

「…ここが死後の世界だとしても、三年前に死んだ詩織と今の俺がこうして存在しているのがわからんな」

「…もしかしたらここには本当に時間の概念が無いのかもね」

「時間の概念が無い？時間が流れて無いって事か？」

「…携帯は見た？」

言われてハッと気付く。

あまりにも突然にこの状況におかれたせいか、真っ先に確認すべき事を忘れていた。

「…まず状況を知るのがこういう場合の鉄則だと思うけど」

呆れたような織笠の声だが反論も出来ないので、曖昧な返答と共に携帯を見た。

アンテナのマーク当然立っており、圏外だったがそれよりも気になったのは日付と時間だった。

《16 / 38【冥】》

《0 : 123》

「…は？」

有り得ない日付と曜日、そして時間。

これが本当なら今日は16月38日の冥曜日、0時123分という無茶苦茶な時間だ。

「私の携帯も時計も似たような感じ、この意味がわかる？」

「ええ…」

織笠の問いに詩織は神妙にコクリと頷いた。

「このままじゃお正月が来ないですね」

「……………」

大まじめな詩織の問いに織笠は俺達に会ってから初めて目を丸くしていた。

冷静な雰囲気、織笠から初めて一本を取った気分だ、…詩織がただ。

「彼方…ちよつと」

チヨイチヨイと手招きされたので仕方なく織笠に寄る。

どうでもいいが呼び捨てかよ。

「彼女つて…」

「ああ…えつと、ちよつと残念な奴だな」

一見クールに見えて実は天然なのが詩織だった。

全く関係無いが小学生の遠足の説明会の時、あんまんはおやつに入りますか？とビツと綺麗に手を上げて質問した詩織の姿を思い出す。

「詩織さん…つまりね、三年前に死んだあなたとその三年を生きた彼方が一瞬に居る、どちらも死んでからここに来たとしたらここには時間、そのものが存在しない、意味の無いものという訳」

少し戸惑いながらも織笠は詩織に状況を説明した。

「なるほど…」

「わかった…？」

詩織がウンウンと頷くと織笠も安心したようにホッと息をつく。

「つまりここでは誕生日が来ないから歳を取らない…って事ね」

「……………」

難しい顔をして片手で顔をおおう織笠。

「詩織」

なのでここは助け船を出してやろうと考えた。

「つまりだ、あんまんを買ってから三年後にもう一度あんまんを買ったけど二つの中身はあんまんだったという事だ」

「…なるほど」

「…それで言いの？」

半ば呆れた声の織笠に良いんだよと伝えるように俺は頷く。

「これで三人…か」

それで納得したのか織笠は長く続く廊下の先を見た。

「私達に振り分けられたナンバーだけどね、詩織さんの14番で最後だった」

「つまり俺達は全部で14人…かな、普通に考えれば」

部屋のネームプレートにはNo.13と印されていたし、俺はかなり後ろの方だったようだ。

「ちなみに織笠は？」

「私？私は9番だったけど？」

「9番…？」

部屋の順は番号の順だ。

なので9番目の織笠が14番目の詩織に最初に出会った事が気になった。

「私の他にも何人が居る事はわかってたから、最初に全部で何人居るのか確認しただけよ」

「…なるほど」

しかし織笠のこの冷静さ、そして行動の速さ。

どこか不自然なものを感じながらも今その答えが出て来るはずは無い。

「とりあえず…なんだが、説明会…ってのに行かないとな」

そこで今の俺達のおかれたこの状況の答えが出れば良いが…。

「賛成…、あつ、だけど他の人は？」

「これだけ通路で話してて誰も出て来ないし、みんなもう大広間に集まったかもね」

詩織の疑問に織笠が答え、詩織もそれに納得したのかなるほどと頷いた。

「それに大広間に行けばどのみち全員が来るだろう、んじゃ…行くか」

俺はそう言って詩織の車椅子を運転しようかと思い、取っ手に手を置いた。

キュルルルッ

「おわっ…！」

だがそれを拒むように詩織は車輪を回して俺から距離を取るように前へと進み。

バシンッ

「あうっ…」

壁にぶつかった。

「い、良い、一人で行けるから」

顔を赤くさせながらも、それでも詩織は気丈にそう答える。

「…そうかよ」

俺はやれやれといった具合に詩織の後へと続いた。

「……………」

背後では織笠が詩織の車椅子をじっと見つめていた。

プロローグへ大広間

薄暗く続く廊下を俺と織笠が歩き、詩織が車椅子の車輪を転がしていく。

大広間と書かれた部屋を見つけるのにそう時間はかからなかった。

中に入ると廊下の薄暗さとは一転して大広間は明るく、暗さに慣れた目を刺激される。

大広間と呼べるほどの大きさでは無いにしろ、丸い机とそれをぐるりと囲む椅子。

既に8人の男女が椅子に座っており、部屋に入って来た俺達を一斉に見た。

織笠は冷静に詩織は状況に戸惑い、俺は軽く手を振っての入場。

何人かは手を振り返してくれたが大半は無反応だった。

…これで11人か。

俺と詩織、そして織笠の境遇を考えればここに居る皆も立場は同じなのだろうか？

「…一つ、警告しとく」

「…ん？」

横に居た織笠がぼつりと俺達二人にだけ聞こえるように呟いた。

「ここから先…不用意な発言や行動は控えなさい」

織笠はそれだけ告げるとさっさと前に出て俺達と距離をとった。

「……………」

織笠の言いたい事は俺にもよくわかっていた。

この異常な建物に集められた14人。

これから何が始まるかはわからないが良い予感ではなかった。

「…そうね、自己紹介に失敗したら痛い娘になっちゃうし」

俺の隣に居る一見クールな天然幼なじみは多分、わかってないだろうが。

俺と詩織も空いている適当な椅子に向かう。

車椅子の詩織の為に椅子を退かし、スペースを作ってやった。

「さて、これで11人目ね、あなた達、名前は？」

新たに大広間を訪れた俺達三人に向け、一人の女が立ち上がり、声をかけてきた。

歳は…大学生くらいだろうか？

「私？ 柏瀬 詩織」

「織笠 未娘…」

女性陣二人が先に自分の名前を告げる。

「私は宇佐 飯子よ、よろしく」

宇佐は二人に軽く手を差し出して握手を求める、二人がそれに答えると今度はぐるりと俺の方を見た。

「それで、あなたは？」

「……………」

友好的な宇佐には悪いが俺は名前が名前だけにあまりギャグ染みているのでイマイチ、こういう場で言うのに戸惑う。

「ちよつと！ 聞いているの？」

だがそんな俺の心中なんぞ察せずに宇佐は俺に顔を近付かせて来た。

「…聞いているよ、んな大声あげなくても」

「彼方、早く遼 彼方って名乗らないと皆彼方をどう呼べばいいかわからないんじゃない？」

「いや、もう名乗る必要無くなったわ」

親切心でそう言った幼なじみに感謝という名の舌打ちをして俺は答えた。

「遼…彼方？」

宇佐を見ると明らかに笑いをこらえるように頬を引き攣らせていた。

「人の名前とか笑うのは失礼だと思うが…」

「そ、そうね…、ごめんなさいね、遼 彼方さん」

「ちよつと、フルネームとか止めてくれないか」

「なんか語呂がいいから…、それじゃあ皆、改めてもう一度自己紹介でもしましょうか？」

宇佐が周りをぐるっと見渡しながらそう声に出した。

「おいおい宇佐さんよ、これで何度目の自己紹介だよ？ いい加減だるくなるわ」

椅子に寄り掛かって両手を頭の後ろに置いていた男がうんざりとした声を出した。

金髪のカラの悪そうな男だ。

「大事な事よ、これをしないと誰が誰だかもわからないでしょ」

そんな男の態度が気に食わないのだろう、宇佐も目を鋭くさせていた。

「だから全員揃ってからやれつつたんだよ、俺は」

男は面倒臭さそうにため息をつく。と男達の方に向けて片手を上げた。

「赤松^{あかまつ} 慶二^{けいじ}だ、まつ…仲良くやっていこうや」

赤松は含みのある笑みを浮かべると軽く挨拶を済ます。

「んじゃ、次」

そしてそのまま自分の隣に居るガタイの良い男の肩にバトンタッチするように手を置いた。

「誹泉^{ひいずみ} 紳一^{しんいち}だ…」

誹泉は名前だけ淡々と告げると腕を組んで目を閉じた。

恐らくかなり鍛えてある身体も合わさって威圧感がある。

その誹泉の横、まるで誹泉を壁にして赤松と距離を取るようになっている男…いや女？中性的な顔立ちだしどっちだろう？

「えっと…僕かな？深見^{ふかみ} 柁^{まさき}だよ、よろしく、あの…男です」

ぺこりと頭を下げる深見と名乗る男は俺の言いたい事がわかってるのかそう付け加えた。

中性的な美青年の顔立ちの女と言われても納得してしまいそうである。

「よろしく、彼方さん」

「ああ、よろしく…」

深見は友好的に俺に握手を求めて来たので俺もそれに応えた。

「……？」

不可解なのは深見が俺の手を離そうとせずに俺の目をじっと見つめていた事だった。

「おい…手」

「あつ…うん、ごめん」

深見は慌てて俺から距離を取るように離れると両手を振った。

…顔を赤くさせているが、うん、気にしない事にしよう。

「あはは…、えっと…じゃあ次は」

深見はキョロキョロとメンバーを見渡すと。

「じゃあ私が…」

一人のサラリーマン風の男が立ち上がり、ぺこりと頭を下げた。

「さかき まひろ 榊 昌弘です、いやあ…皆様若い方が多くて少し気恥ずかしいですな」

榊さんが言う通り、40代半ばであろう彼の年齢は俺達の中で群を抜いている。

しかしこれで俺達の年齢は本当にバラバラだというのがわかった。

しかし…どうにも幸薄そうな顔をしているな。

「はは…名刺でもあれば良いんですが、先日リストラされちゃいます」

いや、本当に幸薄なんだこの人…。

「次は僕なんだけど…その前にちょっと一言良い？」

次に自己紹介を始めたのはメガネをかけた太った男だった。

見た目で人を判断すべきでは無いが見た目で判断するなら典型的なオタクに見える。

「…なんだ？」

「その車椅子に乗ってるお嬢さん」

「え？…私？」

詩織が自分を指差すと見た目オタクはコクコクと頷いた。

「車椅子キヤラ来たッ！これで勝つー！！」

見た目オタク…、いやもういいや、核心した、見た目と変わらず中身もオタクだこいつ。

「…えっと、この車椅子には兵器とか仕掛けて無いけど」

「詩織もこれ以上話しをややこしくしないでくれ…、んで、あんたは？」

おおまえだ
「大前田 友清ともきよだよ、よろしく、遼殿」

「あ、ああ…よろしく」

…あまり深く突っ込まないようにしよう。

これで大広間に居る男性陣の自己紹介は終わったが気になったのは男性陣が固まっている事だった。

いや…、別に合コンしてるって訳じゃないから別に良いんだが…、それにしてもあからさまに男性陣が一人の女性から距離を置いている。

「なあ、あんたはなんで一人だけ離れてるんだよ？」

俺はその離れている一人の女性に近付き。

「こ、来ないで下さい…！」

「…はい？」

思いくそ拒絶された。

「彼方、あなた一体その人に何をしたの!!」

「何もしてなかっただろうが!今まで見てて!!」

横から来る詩織の怒声を正論で返してやる。

「あつ…すいません、その…、いきなり大声なんて出したりして」

「いや…いいけどさ」

謝る女性に一步近付く。

ガタッ

女性は椅子事俺から離れる。

「……………」

一步近付く。

ガタッ

女性は椅子事俺から離れる。

「大丈夫…大丈夫…大丈夫」

女性はそう言いながらも顔を引き攣らせていた。

「彼女は…ちょっと男性恐怖症っていうのかな？それなの」

その様子を見ていた宇佐がそう説明してくれた。

「う、ごめんなさい！！」

「いや…まあ、いいけどさ」

多少は傷ついてはいたけど大きく謝る女性になんともない風に応えた。

…なるほど、男性陣が固まっていた訳がわかったわ。

「わかった、俺はこっから動かないから、そんな怯えないでくれ」

女性から距離を取って話しかけると女性はコクコクと首を縦に振ってくれた。

「さっきも自己紹介したけど俺は遠 彼方、こっちは柏瀬 詩織、もう一人は織笠 未娘だ、あんたの名は？」

さっきから興味なさそうに場を眺めている織笠の事も紹介しつつ、俺は再び声をかけた。

「は、はい…、水茂です、水茂^{みなも} めぐみ」

「そっか、これからよろしくな、水茂さん」

「勘弁して下さい！！」

「……………」

こうまで拒絶されるとは…、やばい、ちょっと泣きそう。

「気にしないで良いと思うよ、僕らもあんな感じだったし」

大前田がフォローを入れてくれた。

「いやあ、男性恐怖症キャラのテンプレはやはり怯えられるですな」

いや…フォローじゃ無かったか。

あゝ…うん、でもそういうアニメとかでも最近そんなキャラが増えたよな。

「あとは殴ったり暴力振るったりして来るとかか？」

ついニヤリと笑って返してやり、言うてからしまったと口をあけた。

「…ほほう、遼殿もなかなか通と見た」

キラリとメガネを光らせて大前田がかっこつける。

「い、いや、違…」

オタク…と言える程知識豊富では無いが、まあかじった程度には知識があったり。

「なんだよ、大前田の同類かよ…」

「だから違っって…」

赤松が呆れたように茶化して来るのを俺は面倒臭さそうに返す。

別にアニメや漫画といったオタク文化だけで無く、バイクや車、政治からギャンブルの話しだって出来る。

まがりなりにも社会に出て生活した身として、それは必要な事だった。

話題を身につければ会話から置いていかれる事は無い。

会話から置いていかねければ…グループから外れる事も無い。

だからこそ話題性のあるアニメや漫画、音楽にドラマや映画も見て

ゲームやってギャンブルもやって先輩や友達のススメでスノーボーやゴルフといったいろんなスポーツもやって。

「…それが嫌だったのかもな」
楽しかったかと聞かれればどれも楽しかったが…結局は中途半端のまま、知識を仕入れ、皆の話しに適当に話を合わせて…。

そんな生活だった。

「…それが嫌だったのかもな」

だから…自殺した、のか？

いや…そんな事、少なからず誰もがやっている事だと思う。

「…彼方がオタクになった」

「だから違うつて…その虫を見るような目は止める!!」

幼なじみからの視線がキツイ…。

いや、詩織からすれば久しぶり？に会った成長した幼なじみがオタクになってたつて事だし、そりゃキツイ目にもなるか。

「幼なじみ萌え…とか叫ぶ人になるなんて」

「叫ばん叫ばん」

「…叫ばないの？」

いや、そんな素で返されてもこっちが困るんだが…。

「つーかなんだ？叫んで欲しいのか？」

「そ、そんな訳無いでしょ！馬鹿ッ!!」

…何で怒るよ。

「ほほう…、では遼殿はあくまでもオタクでは無いと？」

大前田が口元に笑みを浮かべながら近付いてくる。

「では…彼女を見てもまだそんな事が言えますかな？」

そして自信満々といった具合にまだ自己紹介の終えていない最後の一人を紹介した。

椅子にチヨコンと座り込んだ少女…、俺達の中でも一際年齢が若い。というか若い少女。

この部屋に入って最初にその少女に目があったのは別に俺がロリコンとかそんなんじゃないかって少女の異質のせいだった。

ここに居る者は俺を含め全員私服なのだが…。

その少女は…巫女服だった。

巫女服といっても見た印象で感じた事で普通の神社の巫女さんが着ている正規？の物とは違うっぽい。

「……………」

「彼方…、鼻の下伸びてる」

「あ…いや、違う、そんなんじゃないって」

必死に否定しつつ、巫女服少女に近付いてみる

「い、こんにちは…」

少女は怯えながらもぺこりと頭を下げてくれた。

「こんにちは、名前は？」

「えっと…そのー」

名前を聞くと少女は恥ずかしそうに苦笑いを浮かべる。

その反応を俺はどこかで見たような気がして、それはすぐに思い浮かんだ。

…俺が名前を言う時と似てる。

「さっきも言ったが俺は遼 彼方なんつーふざけた名前なんだ、お前は？」

「その…、ひむかい…ひなた、です」

「ひむかい…ひなた？」

なんだ…普通じゃないか、何がそんなに言いづらかったんだ？

「はい、日に向かうと書いて日向^{ひむかい}、日に向かうと書いて日向^{ひなた}、それで日向 日向です」

「…あつ、なるほどね」

日向 日向、うん、うちのおかんと良い勝負だわ。

「しっかし…こんな子供が居るなんてな」

そういえば…ここに居る全員のどれだけが今のこの状況を理解しているのか…。

俺の場合はたまたま詩織の事を知っていたのが大きかったが。

「いえ…その、日向ちゃん、一人で来た訳じゃなくて」

俺の言葉に宇佐が言いづらそうに話しかけて来た。

「私、お母さんと一緒にここに来たんです」

「母親…？どこに居るんだ？」

宇佐も水茂も大学生くらいだし織笠は高校生、どう考えても年齢が合わない。

「し、詩織…まさかお前」

「ふふ…ようやく気付いたようね」

詩織はわざとらしく笑みを作って見せると。

「あなたの子よ」

「な、なんだってー」

冗談のつもりで言ったのに俺も無理矢理参戦させられてしまった…。

「ちなみに私は母親じゃないから」

「おい、人を巻き込んで自分だけ逃げるな」

いや、俺が最初詩織をからかおうって思ったのが発端だけど。

「彼女の母親はね、部屋に閉じこもったまま出てこないんだ」

幸薄そうなサラリーマン（元）、紳さんが心配したようにそう言った。

「出て来ないって…何してんだよ？こんな子供を一人にして」

普通この訳わかんねー状況で子供を一人にする親が居るのだろうか？

「あ、あの、うちのお母さんがすいません！！」

俺のハテナマークに答えるように慌てて頭を下げる日向。

「じつはね、さっきあなた達が来る前にちょうど、その事について話してたの」

宇佐が深刻そうなため息をついて机に手を置いた。

「あなた達も説明会を受ける為にここに来たのよね？」

宇佐の問いに頷いてみせる。

「僕らもそうなんだけどね、なんか始まる気配が全然無いんだよ、
誹泉さんなんてもう1時間くらいは待ってるんじゃないかな？」

「…別に、たまたま一番に來ただけというせいもあるがな」

深見が見ると誹泉は淡々とした口調でそう告げた。

「やっぱ全員揃わねーとダメってか、ったく…もたもたしてんじやねーっつーの」

赤松は面倒臭さそうに悪態をついて不満をあらわにした。

「だから…ね、私達で來ない人達を迎えに行こうって話しをしてたの」

「なるほどね…」

今大広間に居るのは全員で11人。

つまり後三人來ていないって事になるのか。

「日向の母親の他に後二人か…、さすがにちよつと遅いな」

俺と詩織と織笠の三人は通路で話していた分出遅れたが、それよりも遅いという事はまだ気がついてないって可能性もある。

「良いと思っぜ、このまま待つててもいつ来るかわからんし」

このまま待つてても埒があかないならまだ自分で動いた方がマシだ。

「あの…、なんで来てないのがあと三人だつてわかるんですか？」

水茂が恐る恐るといった具合に手を挙げて発言する。

なるほど、そういえばみんなはまだ知らないか。

「部屋のナンバーは14までしかなかったし、ここには14人居る
つて考えたけど」

俺がそう答えると皆は納得したのか、それ以上の質問は無かった。

「迎えに行くのは良いけど…、でも全員で一人一人を迎えに行くの
つて効率も悪いし、手分けして行かない？」

深見の提案に皆が頷き、俺の方も得に文句は無い。

さて…そうなると俺は。

【A・日向の母親を迎えに行く】

【B・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【C・Bとは別の二人の中の一人を迎えに行くか】

【D・思ったけど動きたく無いしここに居よう】

プロローグへ異常

「それじゃ、私達を三チームに分けましょうか、日向ちゃんと赤松さんと榊さんと大前田さんで日向ちゃんのお母さんを迎えに行く、その間に私と誹泉さんと水茂さんのチーム、遼 彼方さんと織笠さんと柏瀬さんと深見さんのチームで行きましょう」

…あれ？

なんか宇佐が勝手にチーム分けして前話の選択肢が粉々に砕けちっちゃったぞ。

【A・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【B・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【C・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【D・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

…一択じゃねーか。

「おいおい…勝手に話し進めてんじゃねーよ」

これには当然、得に赤松が第一に嫌気がさしたように声を上げた。

「あんたさあ…いつから俺らのリーダーになった訳？」

「別に…そんなつもりは無いけど、ただ単にこれが一番バランスが

良いでしょ？何があるかわからないんだから」

食いかかる赤松に宇佐は眉をひそめながらも返した。

確かにバランスという点でみれば宇佐のチーム分けは悪くない。

三人組になるのは体格の良い誹泉が率いている組。

大広間に入る前から事前に面識のある俺と詩織、そして織笠の三人に車椅子の詩織の為に深見の四人。

そしてまだ幼い日向が居る所もきちんと四人チームになっている。

どの組にもきちんと男が居るというのも大きい。

「チームのバランスなんてどうでも良いんだよ、なんであんたがしきつてるかって聞いてんだよ」

だがこの仕切り分けが良すぎる宇佐のチーム分けは余計に人の反感を食うものだ。

得に赤松なんかは他人の言う事なんざ聞きたくないという態度だった。

「だからそんなつもり無いって言うてるでしょ？だったらあなたがチーム分けすれば良いじゃない！！」

「…てめえ」

宇佐は腕を組み高圧的に。

赤松は睨みをきかせて宇佐を見た。

…ダメだこりゃ、売り言葉に買い言葉も良い所だ。

「…あ、あの」

そんな二人の言い争いの中、意外な人物が恐る恐ると手を上げた。

「…どうしたの？水茂さん」

「私…、男の人と行動するのはちょっと…」

まるで学級委員長が普段発言しないクラスメイトにするように宇佐が聞くと素直に水茂はそう告げた。

「え？あ！ああ…ごめんなさい」

だがこの水茂の発言はさすがに計算違いだったのか、宇佐が言葉に詰まる。

「くつくつく…、なんだよ、それじゃこのチーム分けは成立しねえな」

「赤松…いい加減にしろ、話しが進まん」

「…へいへい」

再び赤松が茶化そうとした所を誹泉が言葉を挟み、赤松も素直に引

き下がった。

「思ったんだけどさ、入れ違いになったら困らね？ほら…僕らが出た後に他の三人が来たりとかさ」

「ああ…うん、そうだね、有り得るかも」

大前田の言葉に榊さんが頷く。

確かに…その可能性もあるか、そうだったら更に面倒だ。

「だったら…留守番役も必要って事だよな」

俺は顎に手を当てて考えながら。

「だったら詩織、水茂とここに残ってるよ」

「え…、私？」

車椅子での移動が仕様の詩織に残って貰う事にした。

別にそこまで集団の移動の妨げになる事は無いが…まあ、誰が残らなきゃいけないし。

「水茂もそれなら良いだろ？男と一緒に移動も無いし」

「え？あ…はい」

水茂は申し訳なさそうにシュンとなりながらも頷いてくれた。

しかし男性恐怖症ね…、最近漫画とかでよく見るネタだったけどここまでとは。

正直面倒臭さいというのが本音だが本人の前で言うのは止めとこう。
殴って来ないだけマシかと。

「んじゃそれで決まりだ、詩織と水茂の二人を残して三人チームでいこう」

「となると」

話し合いの結果…と言っても俺のグループは詩織が抜けてちょうど俺と織笠と深見の三人組になる。

なので日向の母親を迎えに行く四人の中から榊さんが宇佐の居るチームに移った。

【日向・赤松・大前田】

【宇佐・榊さん・誹泉】

【俺・織笠・深見】

そして【詩織・水茂】の留守番組だ。

「さて…それじゃさっさと行くか」

と、大広間を出ようとして立ち止まる。

「どこにだよ、そういえば日向の母親はともかく、他の二人の部屋は知らないぞ」

「ああ…そうか、困ったね」

深見も気付いたのかしまったという顔だ。

「それについては消去法ですぐわかんと思うけど…」

「ああ…そうか、ここに居る俺ら以外のナンバーの奴の部屋に行けばいいのか」

呆れたように織笠に言われたがそう言われれば確かにそうだ。

ええと…俺が13で詩織が14、織笠が9だったよな…。

とりあえずここに居る11人でお互いにナンバーを教え合っがその場面は面倒なので省略しておく。

とりあえずの各ナンバーは以下の通りだった。

No・1・宇佐 飯子

No・2・榊 昌弘。

No・3・今だ来ない日向の母親。

No・4・日向 日向。

No・5・大前田 友清。

No・6・居ない…、つまりまだ来てない。

No・7・水茂 めぐみ。

N o ・ 8 ・ 深見 梃。

N o ・ 9 ・ 織笠 未娘

N o ・ 1 0 ・ 赤松 慶二。

N o ・ 1 1 ・ 居ない、もう一人の方か…。

N o ・ 1 2 ・ 誹泉 伸一。

N o ・ 1 3 ・ 俺…と言ったら名前忘れられそうなんで遠 彼方。

N o ・ 1 4 ・ 柏瀬 詩織。

という訳で 3 ・ 6 ・ 1 1 のナンバーがまだ来てないという訳だ。

「それじゃ、今後こそ行きましょうか」

「気を付けてな」

一旦、大広間を出て三人一組に別れる。

俺と織笠と深見のチームは N o ・ 1 1 の人物を迎えに行く事になった。

なので一度来た道をまた戻る事になる。

「なんで来ないんだろうね？」

その道中、深見が疑問を投げかけてくる。

「そりゃ…普通に考えてまだ寝てんじゃないか？あのテレビ、お前も見たろ？」

「あ、やっぱり皆の部屋でも流れたんだ」

「そうじゃなきゃ皆、大広間に集まらないって」

普通、こんな訳のわからない状況になったらあのテレビに映った謎生物の言う通りに大広間に行くだろうし。

「……どうかしらね」

「……あん？」

そんな俺の返答に織笠が口を挟んでくる。

「この状況がすでに普通じゃないって事に気付いてないの？」

「そりゃ……気付いてるけどさ、今話しに出てるのは状況じゃなくて人だ、人」

まるで俺の考えを読んでいるかのような鋭い問い掛けに俺は一瞬口ごもるがすぐに反論する。

確かに状況は普通じゃない、完全に異常だ。

だがその異常な状況の中で普通、人がどう行動するか、今回はそれについて言っている。

「……………」

「……………」

「ちょっと……、喧嘩は止めなって、あ！ほら！！ついたよ」

睨み合う俺と織笠の間に挟まれて、さすがに居心地が悪かったのだろつ。

No・11の部屋の前についた深見は嬉しそうだった。

「くにさき国崎 みずほ瑞穂…」

そこに記された名前も大広間の誰のものとも一致しない。

「間違いないな」

とりあえず…だが、コンコンと軽くノックを試してみる。

中からは何の反応も無かった。

「おーい！誰か居るのかぁ！！」

今度は呼びかけてみる…が反応は無い。

「ほらな、やっぱ寝てんだよ」

「もしくは入れ違いで居ないのかもね」

肩を竦める俺に深見が言葉を付け加える。

「…そう思うなら中を開けたらどう？」

だが織笠の態度は変わらず、刺々しいものだった。

「…たく…、素直に負けを認めろよ」

まあどのみち中を確認する必要はあったが。

「入るぞ」

返事は期待せずに、扉を開けた。

「…は？」

そして俺は固まってしまふ。

予想が外れ、部屋の主である国崎 瑞穂なる少女の座り込んでいる後ろ姿が見えたからだ。

少女はテレビの前からピクリとも動かない。

「…おい」

呼びかけてみる…が、返事どころか少女の後ろ姿は全く動かない。

「…寝てるんじゃないかな」

「座ったままか？…いや、うん…そういう人も居るよな」

深見の言葉に頷き、俺は寝てる？少女を起こそうとして。

「…？」

再び…立ち止まった。

何か…言っている？

ぶつぶつとだが…囁くように微かに、後ろ姿の少女が声を発していた。

「…君、…ヨウ君、リョウ君」

リョウ…君？

誰だ…？誰の事を言っている？

少なくとも大広間に居た者の中でリョウ君とやらの該当する人物は居ない。

「リョウ君、私は悪くないの…私は全部あなたの為に、そうよ…だって私はあなたの物だもの」

「……………」

国崎 瑞穂なる少女のその異様な雰囲気、背筋が冷たくなった。

だが、ここで声をかけない訳にも行かない。

「おい、聞いてんのか？」

俺は国崎 瑞穂なる少女の肩に手を置き、こちらに振り向かせようとした。

すでに後悔しても遅かったが。

数秒もたたない内に…織笠の言った事の意味がようやくわかった。

何故…もっと早く気付いて、慎重に行動しなかったのだろうか。

ここに居る者達は…その全員が自殺してここに居る。

つまり…全員が一度、自分を殺している。

その時点で既に”普通”とは掛け離れた”異常”である。

「…あ」

気付いた時にはもう遅く。

圧倒的に手遅れで。

国崎がその手に持っていた脇差しくらいの長さの日本刀が。

今まさに俺の腹を突き刺そうと動いていた。

プロローグへ異常（後書き）

【おまけ】

詩織「彼方、何してるの？」

彼方「ん？ああ…、ちよっとメモしてるんだよ」

詩織「メモ？」

彼方「一度にいろんな奴が出てきたからさ、誰が誰だかをさっさと覚えとかないとな」

詩織「そういえば彼方、昔っから人の顔と名前覚えるの苦手だもんね」

彼方「自慢じゃないけどな」

詩織「自慢にしちゃ駄目だけどね」

彼方「よしっと…、これでいいか」

詩織「忘れないように前書きに置いておいた方が良くないんじゃない？」

彼方「前書きに置くって何！？普通そこは肌身離さず持ってるって言うだろ！！」

詩織「次話から彼方メモが前書きに置かれるようになりました」

彼方「勝手に話しを進めるな！何その説明口調」

詩織「彼方メモはシナリオが進む事にこまめに更新予定です」

彼方「毎回消しゴム使って書き直せってか、おい」

詩織「では次回もよろしく」

彼方「…一応、これも書いておくか」

【生存者数・14人】

プロローグへ設定少女（前書き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 飯子 いつみ いいこ

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて》

No. 2・榊 昌弘。（さかき まさひろ）

《幸薄そうなおっさんという第一印象だったが本当に幸薄かった、頭の毛の方はまだ薄くなさそうなのでなによりだ》

No. 3・今だ来ない日向の母親。

《母親がこんな場所です子供を一人にするなよ…》

No. 4・日向 日向。 ひむかい ひなた

《ロリ巫女、それ以上何を望む？》

No. 5・大前田 友清。 おおまえだ ともきよ

《太った男、オタク、何か同類のように思われてるが俺はどっちかって言うとライト、隠れオタ》

No. 6・居ない…、つまりまだ来てない。

No. 7・水茂 めぐみ。 みなも

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる、穴を掘るは使えるのか？》

No. 8・深見 柁。 ふかみ まさき

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした男…だよな？》

No. 9・織笠 未娘 おりかさ みこ

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、なのに俺はタメ口されてる》

No. 10・赤松 慶二。 あかまつ けいじ

《リアルじゃ関わらないようにするだろうヤンキー、何でこいつがここに居るんだろ?》

No・11・居ない、もう一人の方が…。

No・12・誹泉 ひいずみ 伸一 しんいち。

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、体格もこのメンバーの中で一番良い、強そうな奴》

No・13・俺…と言ったら名前忘れられそうなんで遼 はるか 彼方 かなた。

《自分の所に何書けってんだ?とりあえずリストカットで自殺してここに来た、配布されたのはナイフ》

No・14・柏瀬 かしわせ 詩織 しおり。

《車椅子愛用な幼なじみ、死んだのは三年前、自殺、あれ?そういや…何自殺したんだっけ…?》

【生存者数、残り14人】

プロローグへ設定少女

突然の出来事に脳は完全に停止していた。

いや、脳が動いてた所でたぶん、身体の方が反応しないだろう。

人間はだいたい、不意の事態には対処出来ない。

今回のそれが正にそうだ。

「彼方ッ!!」

だから。

国崎の持つ脇差しが俺の腹の真横を通り過ぎてくれたのは俺では無く、織笠のおかげだ。

彼女が俺の身体を引っ張り、脇差しの一撃から俺を守ってくれた。

それも後数秒遅かったらどうなっていたかわからない。

「生きて…る？」

へなへなと身体中の力が抜けた。

「う…うわあああああああ!!」

一瞬遅れて深見の悲鳴が部屋に響く。

当然だ、今まさに目の前で人が死にそうになったのを見たのだから。

当人である俺はただ安堵していたが、一步間違えれば死んでいた。

そしてもう一人の当人はと言えば。

「……あなた達、誰？」

……涼しい顔してやがる、信じられねえ。

怒りが込み上げて来た。

「てめ」

「安心して、怪しい者じゃないわ」

くっつかろうとする俺だったが織笠がそれを制止させるように俺の前に手を出し、国崎に声をかけた。

「……リヨウ君はどこ？どこに居るの？」

国崎はキョロキョロと辺りを見渡し、リヨウ君なる人物を探す。

「誰だよ、そのリヨウって奴」

「リヨウ君はリヨウ君だよ、私の恋人、私の運命の人、私の最愛の人」

「……………」

うつとりとした表情を見せる国崎に俺はこの女の正体が予想出来た。

何より目が正気じゃない。

「ねえ…この人、大丈夫…なの？」

「大丈夫なように見えるならお前も大丈夫か？って返してやる」

俺がそう答えると深見もそうだよね、と頷いた。

国崎 瑞穂は間違いなく、正気じゃない。

その理由はリヨウ君なる人物と関係するのは明白だった。

だったら可能性は二つ。

一つは単純にそのリヨウ君とやらの恋人であり、彼が側に居ない事で気が動転している事。

そしてもう一つは…。

国崎 瑞穂はリヨウ君とやらの狂気を纏った愛を持っている可能性。

ヤンデレ…とかそんな言葉がこいつにはピッタリだと思えた。

「とりあえず…部屋から出て僕らについて来て欲しいんだけど」

俺はもう近付きたくないので深見が勇気を出して話しかけてくれた事に感謝。

「嫌ッ！私はリヨウ君を探すの！！」

「…あはは」

キツパリとした返答に深見が言葉を失う。

「彼方さん…あの」

「悪いが断る、あんまし関わりたくない」

上目遣いで助けを求めてくる深見の視線に見とれそうになるのを必死に抑え、バツサリと切り捨てた。

こいつは見た目には女にも見えるが俺にその趣味は無い。

「でも、彼女を連れてかないと…」

「ふむ…」

話しは進まないか。

「ちゅー訳で織笠に頼もう、女同士だし」

「…はあ」

丸投げしてきた俺に対してため息をつきつつ、織笠は国崎に向かう。

「後は私が連れてくから、先に大広間に戻ってて」

「…いいのか？」

「ただ一つだけ、二人に約束して貰いたいんだけど」

織笠がクルリとこちらを向いて、慎重な表情を作る。

「ここでの事…、他の誰にも言わないって事、特に彼方」

「まあ…騒ぎをでかくするつもりは無いけどな、何で特に俺？」

国崎が突然人に向けて脇差しを振りかざす正気じゃない人であるのは事実だが…、ここで騒ぎ立てても面倒が増えるだけだろう。

「深見もそれで良いのか？」

「僕は良いけど…彼女、本当にほっとしても大丈夫なの？」

「ただ単にこの状況に動揺してるってなら落ち着いたら大人しくなるだろ」

それがベストなんで…そう願うでしょう。

織笠に国崎の事を任せ、俺と深見は一旦、大広間へと戻る事にした。

「織笠さん、すごかったね」

「おかげで助かったわ…、俺ももっと警戒するべきだったな」

織笠の言う事を素直に聞いてもつと慎重に行動するべきだった。

「他の皆…大丈夫かな？」

「他の二人が国崎みたいな奴だったら…わからんな」

いや、あんなのが何人も居てたまるか。

「…!!」

「…ん？」

大広間に近付いていくと中から怒鳴り声が聞こえて来て思わず足を止めた。

…この声？

「宇佐さんの声だね…相手は誰だろう？」

深見も足を止め、俺に声をかけてくる。

たぶん、さっきの様子から見るに宇佐と一番揉めそうなのは赤松だろうな…。

そつと聞き耳…を立てる必要も無く怒鳴り声は聞こえてくる。

「あなたの身勝手な行動のせいでどれだけ他人に迷惑かけたか…わかってるの!!」

あゝあ、やってるよ…。

「ッ！またそうやって逃げようとして…いい加減ちゃんと答えなさ

い！！」

いやぁ…白熱してんな。

「あなた…さつきからふざけてるの？私を馬鹿にしてるの！！」

…ん？

違和感…いや、明らかにおかしい宇佐の怒鳴り声に俺は首を傾げた。

「なんか…変だよな？」

深見も気付いたのか、俺に同意を求めてくる。

「変だな…、さつきから宇佐の声しかしねーぞ」

単純に宇佐の言葉を聞いていると会話しているようだが相手の声は一向に聞こえてこない。

まるで宇佐の怒鳴り声が一方通行に相手に向かってるようだ…、もし怒鳴られてるのが赤松ならこんなに大人しくはしてないだろう。

そんな疑問を持ちつつ、大広間へと入り。

「…えっ？」

俺は戸惑いに思わずそう声を出した。

宇佐に怒鳴られていたのは先程まで大広間に居なかった新キャラ。

サラサラと風が靡けば光が舞うような金色の髪が目立つ。

左目につけてある眼帯が目立つ。

右手にだけ嵌めてある手袋が目立つ。

ゴスロリのフリフリとした衣装が目立つ。

だが何よりもその顔、日本人離れしたとんでもない美少女なのが目立った。

まるで存在そのものが一つの芸術品のようにさえ思えてくる少女。

「…詩織、誰だ？あのトンデモ美少女は？」

状況を聞き出そうと詩織に近付き、思わず本音が出た。

「彼方…見すぎ」

我が幼なじみはそんな俺の本音に軽蔑の眼差しで返してくれた。

「いや、あれは誰だって注目すんだろ…」

「…はあ、いいけどね、彼女は宇佐さん達が連れて来た人」

「…マジか」

選択肢を誤った気分だ。

片方はトンデモ美少女、もう片方は脇差し振りかざすある意味トンデモ少女（と言っても容姿はなかなかだったが）だもんな。

「しかし…なんで宇佐はあんな怒鳴ってんだ？」

宇佐は俺達にも気付いていないのか、少女に向けて怒鳴り続けていた。

「彼方もあの人と話してみればわかるよ」

詩織のうつすらと笑みを浮かべた仕草が気にはなったが、言われた通りに話してみる事にする。

「おゝい、宇佐、あんまし揉め事はよそうぜ」

なのでまずは宇佐を退かす所からだ。

「揉め事って…私はそんなつもりじゃ」

「お前にそんな気が無くても結果的に空気が悪くなりゃ一緒だよ、ほら、向こう行つてな」

ここで話を切らないと今度は俺が宇佐の怒鳴りの対象になりそうなので詩織や水茂達の方へ肩を押した。

「…あなたもなの、遼 彼方」

その瞬間、宇佐が小声でそう呟いたのが聞こえた。

…ちよつと恨まれたか？

まあ…あのまま怒鳴らせ続けてたら宇佐本人が恨まれただろうし、これで良いだろう。

さて…と気を取り直して少女を改めて見た。

「……………」

言葉を発しない、上の空な少女はまるで一つの人形を思わせる。

「…よつ、俺は彼方、遼 彼方だ、よろしくな」

「……………」

俺の自己紹介に少女からの返答は無い。

変わりに紙とペンを取り出すとスラスラと何かを書き、俺へとその紙を手渡す。

【うむ、良い心掛けだ、人の子よ】

中身はそんな感じの良くわからない文章（字は可愛らしい）だったが、それよりも俺が気になったのは。

「お前…もしかして、喋れない、のか？」

前にテレビでやっていた声を失った子供のドキュメンタリー番組を思い出す。

確か失声症という病気があったはずだ。

「……………」

俺のその言葉に少女はコクリと頷いた。

「そっか…なんかその、悪いな」

俺はなんだか申し訳なくなつて少女に謝る。

「……………」

そんな俺の態度を見て少女は再び紙とペンを取り出すとスラスラと何かを書き、俺に渡した。

【うむ、私の声に込められた魔力が暴走するのを防ぐ為だ、仕方あるまい】

「…は？」

えーと…、そのー…、うーんと…。

「ドココト？」

ちょっと意味がわからない。

【私の前世は強大な魔力を持った悪魔であり、その能力を私も受け継いでいるのだ】

「…は？」

えーと…、そのー…、うーんと…。

「ドユコト？」

ちょっと意味がわからない。

テイク2を要求すると再び少女はスラスラと紙とペン。

【つまり私の発する言葉一つ一つにさえ、計らずとも強大な魔力が付加され、その影響は貴様ら人間世界の　　】

読むのが面倒になって来たのでもう良いや…。

っーか…どっかで見た事ある設定だな、おい。

「ちなみに…その眼帯は？目もらいでもしてんのか？」

次に気になったのは少女の左目に付けられた眼帯。

【魔眼の発動を抑える為の物だ、不便だがこれを外せば世界がヤバい】

…ヤバいらしい。

「…そのかたつぽだけしてる手袋は？」

【右手の暴走を封印する為の物だ、これを外せば私は覚醒してしまう】

暴走するのか覚醒するのかどっちなのだろう…？

「…はあ」

感想としては勿体ないとか残念、の言葉につきる。

トンデモ美少女なのを差し引いてもこいつ、恐ろしいまでの中二病な電波だ。

これではせつかくの容姿も光輝くはずが無い。

「お前…名前は？」

最後に…仕方ない、といった感じに少女の名前を聞いた。

少女はスラスラとペンで紙に自分の名前を書き、俺に見せる。

【勅使河原 社】

「えっと…うーん？」

なんと読むのだろう？

「んんかわはら…しゃ？」

俺が首を捻り考え込むと勅使河原はムツとなって俺からさっきの紙を奪い取ると。

【勅使河原 社】

丁寧にも読み方を追加して書いてくれた。

「つーか本名乗れよ！あ…いや、この場合名乗るって言わないか」
勅使河原 社とか…妙に偽名臭い、いや…、僕の考えたカツコイイ
名前みたいな印象だ。

俺も人の事言えた義理じゃないが、これは本名だし。

【ほう、気付いたか、私の真名に、だが私の真名を言った所でお前は理解出来まい、いや人の子が聞けば耳がただれ落ちるやもしれぬ】
ふふん、と得意げに鼻を鳴らしながら少女は紙を見せてくる。

あゝあ、もう勅使河原でいいや…。

【しかし私の真名に気付くとは、ぬし、なかなかに見所がありそう
だ】

「…そりゃどうも」

もちろん嬉しくは無いが。

しかしこりゃ…印象的に生真面目な宇佐が怒鳴り込む訳がわかった
…。

チラッと宇佐を見ると今にも噛み付きそうな目を向けていた。

…この二人は根本的に合わないだろうな。

「んで、お前はなんで遅れて来たんだ？」

【暴走しかけた魔力を鎮静化する為に瞑想していた】

つまり寝ていたのだろう。

いい加減相手にするのが面倒になって来たぞ…。

「きゃあっ！！」

「…ん？」

水茂が入り口の方に向けて叫び声を上げている。

つられて入り口を見ると織笠と…、脇差しを持った国崎が居た。

状況の把握に数秒かかり、把握した瞬間後悔した。

片手で顔をおおい、あちゃーみたいな仕草をとる。

「ちよつとあなた！なんなの？そ」

食いかかろうとする宇佐の首根っこを掴み（面倒事回避の為）、俺は織笠を睨んだ。

「…織笠」

「これが条件だったのよ」

織笠は何食わぬ顔でしれつと答えやがった。

ついでに本人である国崎も何食わぬ顔でしれつと椅子につく。

【あれは妖刀、笹錦】

「美味そうな名前の刀ですね、ええ」

得意げに紙を見せてくる勅使河原を相手にせず、俺はとつちめてやろうかと織笠と国崎に向かう。

そんな俺の行動は新たに大広間に入って来た人物によって掻き消された。

「ちょ！みんな！！大変だよ！！」

大前田 友清が酷く慌てた様子で部屋へと駆け込んで来たのだ。

「…はあ」

隠す事の出来ない溜め息が出てきた。

プロローグ〈宗教狂い〉（前書き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 うさ 飯子 いいこ

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて【配布武器：？】》

No. 2・榊 さかき 昌弘 まさひろ（さかき まさひろ）

《幸薄そうなおっさんという第一印象だったが本当に幸薄かった、温厚な人【配布武器：？】》

No. 3・今だ来ない日向の母親。

《母親がこんな場所で子供を一人にするなよ…》

No. 4・日向 ひむかい 日向 ひなた。

《ロリ巫女、それ以上何を望む？【配布武器：？】》

No. 5・大前田 おおまえだ 友清 ともきよ。

《太った男、オタク、何か同類のように思われてるが俺はどっちかって言うとライト、隠れオタ【配布武器：？】》

No. 6・勅使河原 てしがはら 社 やしろ。

《前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系中二病美少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、設定はつけければ良いってものじゃない【配布武器：？】》

No. 7・水茂 みなも めぐみ。

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる、穴を掘るは使えるのか？【配布武器：？】》

No. 8・深見 ふかみ 柁 またき。

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした男：だよな？【配布武器：？】》

No. 9・織笠 おりかさ 未娘 みこ

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、な

のに俺はタメ口されてる【配布武器：？】《

No・10・赤松あかまつ慶二けいじ。

《リアルじゃ関わらないようにするだろうヤンキー、何でこいつがここに居るんだろ？【配布武器：？】《

No・11・国崎くにさき瑞穂みずほ。

《殺されかけた、怖い、マジ怖い、新ジャンル、ヤンデレだけど病む相手が居ない【配布武器：脇差し】《

No・12・誹泉ひいずみ伸一しんいち。

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、体格もこのメンバーの中で一番良い、強そうな奴【配布武器：？】《

No・13・遼はるか彼方かなた。

《自分の所に何書けてんだ？とりあえずリストカットで自殺してここに来た【配布武器：ナイフ】《

No・14・柏瀬かしわせ詩織しおり。

《車椅子愛用な幼なじみ、死んだのは三年前、自殺【配布武器：？】《

【生存者数、残り14人】

プロローグ《宗教狂い》

「どうしたんだい？大前田君、そんなに慌てて」

慌てた様子で大広間に入って来た大広間を榊さんが心配するように声をかけた。

「そ、それが…、ゼエツ、…ヒイ、フウ…」

走って来たのだろう、大前田はまず乱れた息を必死に整えている。

「大前田…、お前、一人か？」

誹泉に言われてそういえばと思い出す。

大前田は日向や赤松と一緒に日向の母親を迎えに行ったはずだ、それが今一人という事は。

「何か…あつたのか？」

「それが…日向ちゃんの母親、ちょっとおかしくって」

ちょっとおかしい…ね。

国崎、勅使河原と続けてちよつとどころかなりおかしい人物と会ったおかげか、大して驚きはしなかった。

しかし大広間に来なかった三人の全員がハズレとは…。

「それで赤松殿が、その…キレて」

「まさか…暴力振るつたの？」

宇佐の言う可能性は否定出来なかった。

「わ、わからないけど…、なんかまずそうだったから、みんなを呼ばうって思っ」

…まずいな。

ただでさえ今のこの異常な状況だ、ふとした事がきっかけで全員がパニックになる可能性もある。

「…赤松を止めに行かないと、誹泉、一緒に来てくれ」

「別に良いが…」

この中で赤松を止めるのに一番都合が良いのは一番ガタイの良い誹泉なので俺は声をかけた。

「ち、ちょっと待って、彼女をほって置くの？」

だがそこで宇佐が反論を上げてくる。

ここでの宇佐の言う彼女とは当然、脇差しを常備している国崎の事だ。

…確かにもし国崎が暴れ出したなら状況はもっとまずくなるな。

脇差しという目に見える恐怖に俺は国崎と赤松の危険性を天秤にかけた。

「…わかった、なら誹泉には残って貰うか」

そして結局国崎の危険性の方を上位とした。

一度襲われた分の経験が決定的である。

「俺はどちらでも構わんが、お前は大丈夫なのか？」

「俺は…大前田、場所の案内を頼む」

「マジで？僕？」

別に案内と言えるほどの必要は無いが、一度日向の母親の部屋に行っている大前田が居た方が移動はスムーズだ。

「あとは…」

俺はぐるりと大広間にいるメンバーを見渡した。

途中、詩織と目が合い、彼女が手を上げるが華麗にスルーする。

詩織には悪いが時間が無いのだ、車椅子の移動に付き合う事は出来ない。

「榊さん、良いですか？」

「わ、私かい？」

自分の名が呼ばれた事が意外だったのか、榊さんはびっくりした声を上げる。

赤松を説得出来そうな温厚そうな人、という事での採用だ。

「よし、急ぐぞ」

時間も無いので飛び出すように大広間を出て通路を駆ける。

日向の母親の部屋まで行くのに時間はかからなかった。

が…、そこで俺は立ち止まり、言葉を失う。

壁に身体を寄りかけ、イライラしたように足踏みをする赤松と。

髪が乱れ、殴られた後のように頬を赤く腫らした日向が床に座り込み、顔を俯かせていた。

「…あ」

日向は俺達に気付くとゴシゴシと巫女服の袖で目を拭く。

涙を拭き取るように。

「赤松…、何があった？」

大前田から聞いた話しの流れのままであれば赤松が暴力を振るったとしても日向の母親に対してのはずだ。

何故日向が俯き、頬を赤く腫らし、泣いている？

「あん？…なんだよ、その目」

「遼君…何もそこまで喧嘩腰にならなくても」

思ってた以上に赤松に対して敵意を見せていた俺を榊さんがなだめる。

「まさか…だけどな、お前、日向を？」

殴ったのか？

と後に続かせる言葉を俺はぐつと飲み込んだ。

「…だつたら？」

赤松はへらへらと笑うようにそう答えた。

「てめ」

「違うんです!!」

赤松に詰め寄ろうとした瞬間、日向が大声を上げた。

「これは…私が自分でやっただけです」

「…何言ってんだよ、そんな訳」

「あります！私が自分でやったんですよ！！」

俺の言葉に被せるように日向の必死な訴えが響く。

「…日向？」

その必死な様子に戸惑い、それ以上の言葉が出て来なくなる。

日向からは話しが聞けそうに無い、となればやっぱり赤松か。

「赤松殿…、今北産業」

「はあ？何言ってんだてめえ？」

恐らくは俺と意見が一緒だったであろう大前田が赤松に声をかけるが、その聞き方は通じないだろ…。

「結局…何があつたんだ？教えてくれ」

なので俺は改めて赤松に聞く事にした。

「そのガキの母親がな、いきなり俺らの事を汚れた魂とか不浄な者とか言い出したんだよ」

「うん、そこまでは僕も知ってる」

…って事はそれで赤松がキレた訳か。

「んで、あんましナメた真似してっから黙らせてやるうつてちょっと脅かしてやったんだよ」

そつ語る赤松はへらへらとした笑顔だった。

「…暴力とかしてないよね？」

榊さんが不安そうに聞くが赤松の方はへらへらとした笑顔を消さない。

「手は出してねーよ、本当にちょっと脅かしてやったただけ」

…脅かしての部分が気にはなるが、今は状況の把握が優先か。

「そしたらあのババア、自分の娘をえらい形相で睨みつけて無理矢理自分の部屋に引っ張ってっただんだよ、んで今出て来たのが娘の方だけ」

「…それじゃ、日向のそれは」

一度母親に連れられて部屋に入った後、出来たもの？

「私…です、私がお母さんの部屋に入った後、勝手にやりました」

「日向、いい加減本当の事を…」

ギッ

「何言ってるのかしら？全部本当の事、どこに嘘があるの？」

俺の言葉を遮り、扉が少し開くと一人の女性が顔を出した。

赤松はババアと言っていたが年齢的には30代の後半といった所か。マダムとも呼べる品のある顔立ちのはずだが、その顔は妙に歪んでいた。

そういえば…扉にネームプレートがあるはずだ。

目線をネームプレートに向けると【日向 ひむかい 日景 ひかげ】と書かれていた。

間違いない…日向の母親だ。

だがこいつの異様な雰囲気は何だ？

「…だってどう考えても変だろ、自分で自分を殴ったってのか？」

「ええ、そうよ、日向はね、そういう病気なのよ、ねえ？」

日景が…、日向の母親が、母親らしく、日向に微笑みかけた。

ピクッと日向が身体を震わせた。

「…はい」

自分で自分を傷付けてしまう。

…そういう病気の事は聞いた事がある。

この建物が本当に自殺者を集めているならうつてつけだろう。

だが…違和感は無くならない。

「それとも日向…、さっきまでの言葉は”嘘”、だったの？」

”嘘”の部分強調した日景の物言いは圧力をかけるようだった。

「あの…その」

日向は何かを言いたげに一瞬、俺を見たが。

「…日向、嘘つきはミハシラ様の」

「ッ！私…です、私が…自分で…自分を、殴りました」

「…ほうら、言ったでしょ？」

日景は能面が張り付いたような笑顔を俺達に見せる。

「魂が汚れてた者だから、こうやって人を疑うのよ、汚れた魂は浄化しないと」

その笑顔と後続く言葉に俺は酷い嫌悪感を覚える。

「うわ…また出たよ、ぶっ飛んでるなあ」

「…チッ」

赤松と大前田の様子を見るに汚れた魂とはこの事だったか。

「日景さん…だね、どうか我々と一緒に来て欲しいんだが」

榊さんがかしこまるように頭を下げて日景に同行を求めた。

さすがに一番の年長者なだけはある、連れて来て正解だった。

下手したら俺も赤松と同じやり方をやりそうになるし。

「…あなた達、全部で何人居るの？」

「私達ですか？あなたと日向ちゃんを入れて14人ですが？」

「…汚れた魂がそんなにも、早く浄化しないと」

会話になってはいないが、それでも日景は俺達について来てくれるようだ。

6人になった俺達は再び大広間へ戻ろうとする。

「…あの」

不意に服を引っ張られ、俺は立ち止まった。

「手を、繋いでも…良いですか」

日向だった、前を歩く日景の様子を恐る恐る見ながら俺に声をかけ

てくる。

「え？ああ」

突然の事で戸惑いながら出した手だったが日向はすぐに掴んでくれた。

「あの…、さっきはありがとうございます」

「さっきって…俺は何もしてないぞ」

「心配してくれてたみたいだったので、その…嬉しくて」

日向は顔を赤くさせて俯いた。

「…なあ、お前の母親」

なんなんだ？と次に言おうとした言葉を飲み込む。

あんなのでも自分の母親がけなされれば日向も辛いかと思った。

「あはは…、彼方さんの言いたい事、わかります」

日向は寂しそうに微笑む。

子供のするものとは思えないその表情に胸が痛々しくなった。

「お母さん…、お父さんが死んじゃってから、その…悪い人達に騙されて」

「人間不信になったか？」

「…それもありますが、その…宗教を」

「宗教狂いか…」

汚れた魂やら浄化やらやたらに使ってたのはそのせいか。

「私もよくわからないんですが、ミハシラ様って神様を崇める教団みたいです」

「じゃあお前のその格好…」

正規の物では無いが巫女装束というイメージを見せる日向の格好。

「私は…、神子らしいです、神の子と書いて神子」

そう答える日向は酷く辛そうな表情だった。

何か嫌な思い出を思い出さないようにしているような…、そんな表情。

「ったく…、自分の考えを子供にまで植えんなって話だな」

子は親を選ぶ事が出来ない。

理解も出来ないうちに無理矢理宗教の教えを押し付けられた日向の境遇は酷く辛いものだろう。

「…辛いなら我慢すんなよ」

「…ありがとうございます、その、また…甘えさせて下さいね」

日向は顔を赤くさせながらも手をバツと離れた。

「…ふう」

しかし…日向の母親、日景。

宗教狂いとは厄介な思想の持ち主だな。

「賢者タイムですね、わかります」

「わかられてたまるか…オタ脳」

言ってる意味がわかってしまうのがムカつく。

「これで…全員か」

ナンバーは全部で14、そして出揃った14人の人間。

大広間に戻り、”何か”が始まるのは間違いない。

この訳のわからない状況から抜け出せるはずの”何か”が

「ここに皆集まってるよ」

先頭を歩いていた榊さんが日景にそう説明する。

ガチャリッ

と、大広間への扉を開き、俺達六人は足を踏み入れた。

その瞬間　　。

『パンパカパーン　パンパパンパカパーン　ようこそ”てんごく”へ、クズの皆様！！』

場違いに明るいセルフファンファーレと共に。

俺達の目の前に”ソレ”は現れた。

一 本目【ようこそ、てんぐへ】（前書き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 うさ 飯子 いいこ

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて【配布武器：？】》

No. 2・榊 さかき 昌弘 まさひろ

《幸薄そうなおっさんという第一印象だったが本当に幸薄かった、温厚な人【配布武器：？】》

No. 3・日向 ひむかい 日景 ひかげ

《日向の母親、ミハシラ様という神様を崇める宗教団体を信じてる、宗教狂い【配布武器：？】》

No. 4・日向 ひむかい 日向 ひなた

《母親に強制的に宗教に入れられ、神子にされた少女、自分で自分を傷付ける病気を持っている【配布武器：？】》

No. 5・大前田 おおまえだ 友清 ともきよ

《太った男、オタク、何か同類のように思われてるが俺はどっちかって言うとライト、隠れオタ【配布武器：？】》

No. 6・勅使河原 てしがはら 社 やしろ

《前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系中二病美少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、設定はつけければ良いってもんじゃない【配布武器：？】》

No. 7・水茂 みなも めぐみ

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる【配布武器：？】》

No. 8・深見 ふかみ 柁 まさき

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした男：だよな？【配布武器：？】》

No・9・織笠 おりかさ 未娘 みこ

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、なのに俺はタメ口されてる【配布武器：？】》

No・10・赤松 あかまつ 慶二 けいじ

《ヤンキー、沸点がかなり低いのかキレやすい【配布武器：？】》

No・11・国崎 くにさき 瑞穂 みずほ

《言動が病んでる、脇差し、笹錦（命名、勅使河原）を常に持ち歩

く【配布武器：脇差し】》

No・12・誹泉 ひいずみ 伸一 しんいち

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、結構無口【配布武器：？】

》

No・13・遼 はるか 彼方 かなた

《自分の所に何書けてんだ？とりあえずリストカットで自殺して

ここに来た【配布武器：ナイフ】》

No・14・柏瀬 かしわせ 詩織 しおり

《車椅子愛用な幼なじみ、死んだのは三年前、自殺【配布武器：？】

》

【生存者数、残り14人】

「本目【ようこそ、てんごくへ】」

「あ…ああッ！！」

その存在を知り、俺は驚きに声を発した。

その存在を、俺は知っている。

天使のような翼に悪魔のような身体。

悪魔のような角に天使のような輪っか。

そこに存在しているのはあのアナログテレビに映っていた謎生物、そのものだった。

テレビ内ならばどんな生物が出たって驚きはしない。

作り物やCG等使っていくらでもでっちあげる事が出来るからだ。

だが…これは。

今俺達の目の前に居るコイツは、紛れも無く”現実”だ。

『うけけけけッ！いやあ、良いねえ良いリアクションだよ、皆』

…俺だけで無い、その場の誰もがそいつの出現に驚きを見せている。

『突然の事に呆けてる人も多そうだし、もう一番言おうかな、クズの皆さん、ようこそ”てんごく”へ』

ソレは俺達を見渡し、確認し、もう一度、伝えた。

男とも女ともとれない声。

てんごく………天国？

ここが天国だっていうのか…コイツは？

『僕は皆さんの生活のナビゲーターを勤める、天鬼ちゃんです』

そしてその謎生物は自らの自己紹介と共に頭を下げた。

「…やっぱり、僕死んだんだ」

深見が自分の身体を確認するように見渡し、そう呟いた。

死ぬ前…つまり自殺の寸前の記憶は俺を含め、誰もが持っているよ
うだ。

「ち、ちよつと待ちなさいよ、ここが天国だっていうの？」

『ん…？そうだよ、ここは”てんごく”ですよ、ようこそ！…！』

宇佐の疑問に謎生物…、いや、天鬼、は陽気に答えた。

「ここが…天国？なんだか随分とイメージと違うね」

「可愛い天使たんはどこですか？」

榊の持つ天国のイメージと大前田持つイメージに違いはあるようだった。だが俺のイメージとしちゃその両方を合わせたものだったりする。

「いやあ…だってさ、ほら、天国なんだし。」

『コラコラ！何を言ってるんだい！ここにホラ、天鬼たんが居るじゃない！！』

心外そうにいじけた天鬼が必死に自分をアピールした。

「あの…、ここが天国なら、普通、あなたは天使になるのでは？」

『やれやれ、やっぱり君達はクズだねえ』

謎生物を警戒してか恐る恐ると水茂が手を上げるが自称天鬼はやれやれと首を振った。

「てめえ、なあおい、さつきから黙って聞いてりゃ人をクズ呼ばわりとはナメてんのか？」

『うけけけけッ！怒っちゃった？だって事実じゃん、クズじゃん、しょーがないじゃーん！！』

赤松の脅しも天鬼にとってはどこ吹く風といった具合だ。

『何故なら！君達は全知全能たるゴッド！神様から頂いた命を自分でわざわざ捨てちゃったからでーす』

そう宣言し、天鬼はうけけけけッ！！と続けて笑った。

これは…間違いなく俺達がここに来た原因を指している。

つまり…自殺。

『そんなクズな君達が天国なんて素晴らしい場所、行ける訳無いじゃん』

「…つまり、お前はここが地獄だと言いたいのか？」

『もー…さっきから言ってるじゃんか、ここは”てんごく”だって』

…頭がこんがらがって来た。

ここは地獄じゃなく、天国でもない、でもてんごく？

「…結局、お前は何が言いたいんだよ？」

『つまりねえ…、自殺した人間は天国にも地獄にも受け入れ先は無い、だからこそここに集められます』

自殺した人間は天国にも地獄にも行けない…、そんな言葉を聞いた事がある。

だったら…ここは？

『ここはそんなクズの皆さんが流れ着く死後の世界、天国でもなければ地獄でもない、天の獄と書いて天獄でーす！ー！』

天獄。

単純に読むとなれば天国と同じだが…その意味は真逆と言えた。

天国や地獄はある程度、イメージというかどういった場所かという漠然とした想像は出来る。

だが…ここは天国でも地獄でも無い、天獄というまったく別の世界になっている。

『ここまで言えばクズな皆さんでも、だいたいは理解できたかなー？』

ガタンッ

「ッー!!」

突然、赤松が立ち上がり、椅子を蹴飛ばした。

「てめえ…いい加減にしろよ？さっきから散々人を馬鹿にしやがって!!」

その赤松の今にも殴りかかりそうな雰囲気は俺ものまれかける。

…やるのか？

「そのうるせえ口を黙らせてやるよ!!」

『……………』

赤松の拳が天鬼へと迫り。

「や、止めた方がよいよ！赤松殿！！」

そんな赤松を止めたのは意外にも大前田だった。

「ああ？なんだよてめえ、何で止めんだよ？」

大前田に止められた事が余計に神経を逆なでたのか、赤松は噛み付くように大前田を睨んだ。

「その…部屋を出る時、そいつが言ってたんだよ、天鬼ちゃんはナビゲーター兼アイドルなので天鬼ちゃんへの攻撃行為は禁止ですって…」

「それって…」

ルール…か？

まてよ…確か俺が聞いたルールは。

【十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仏して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしても自由です。】

そうだ…これだ。

つまり…大前田の言うルールが本当なら、あのまま行けば赤松は禁止部分に触れ。

”成仏”…したって事か？

『その通りだよ、いやあ、命拾いしたね赤松君、あつ！もう死んでるんだっけ？うけけけけッ！』

天鬼は腹を抱えてげらげらと憎たらしく笑った。

「禁止だあ？それがなんだってんだよ」

「…部屋を出る時、私達それぞれにコイツからルールが与えられたはずよ」

織笠が淡々とした冷静な口調でそう答えると他の皆もそういえば…と声に出す。

『そうそう、だから本当は説明会なんていらなただけどね』

「どっいつ事？」

『君達それぞれに与えたルールはバラバラだから、皆で教え合えばすぐにわかるよ』

つまり…必要なのはルールの確認か。

「それじゃあ…ナンバー1の宇佐から順にルールをまとめていくか」

「…その必要があるわね、えっと、私が聞いたのは」

【壱・天獄は自殺した者がその記憶を持ったまま辿り着きます、し

たがって天獄にいる者は全員自殺した事のある者です】

「これは…さつき天鬼が言ってた事だな」

これについては事前に詩織の自殺を知っていたので、俺の方は問題無い。

自殺した瞬間の記憶も持っているし。

「皆、これに間違いは無いか？」

誹泉の言葉に異論を唱える者も出てこない。

つまり…本当に、ここに居る全員が自殺者という事になるのだ。

その経緯はどうあれ、自分で自分を殺した者達の集まり。

…誰も言葉を発せず、大広間が重い空気に包まれる。

皆がその時、その瞬間の自殺する光景を思い出しているのか。

だが…俺は。

俺の自殺の理由は…得に無い。

何と無く…と言った所で理解出来る者等、誰もいやしないだろうが。

「……………」

…国崎や勅使河原、日景の事を頭のおかしい奴呼ばわりしたがそう

じゃない。

ここに居る皆が自殺という正気の沙汰じゃない経験を得てここに居るのだ。

今、この場に”まともな奴”なんて居ない。

…道理で、癖の強い個性的な奴ばっかな訳だと俺は心の中で自笑した。

ぐいぐいつ

「…ん？」

そんな俺の服を誰が引つ張っているので振り返って見ると詩織だった。

「ねえ…彼方、皆何の話してるの？」

…この天然クール娘はそれさえわかってなかったのか。

「ルールの確認だよ、お前も部屋を出る時に一つ言われただろ？」

俺はひそひそと説明してやる。

「…何、それ？」

だが、詩織の方はまだピンと来ていないようだ。

「何って…部屋を出る時にアナログテレビにあの天鬼ってのが映っ

て言ってたろ？」

更に説明を加えてやる、以前からコイツを知っているで別にいらつきはしない。

「……てた」

「……え？なんだって」

詩織が小さく呟いたその一言を俺は聞き取れなかった。

だからもう一度言うように詩織に聞き。

「テレビ……壊れてたの」

その一言に、固まった。

一 本 目【不信】（前書き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 うさ 飯子 いいて

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて【配布武器：？】》

No. 2・榊 さかき 昌弘 まさひろ

《リストラされたサラリーマン、温厚な人【配布武器：？】》

No. 3・日向 ひむかい 日景 ひかげ

《日向の母親、ミハシラ様という神様を崇める宗教団体を信じてる、宗教狂い【配布武器：？】》

No. 4・日向 ひむかい 日な ひなた

《母親に強制的に宗教に入れられ、神子にされた少女、自分で自分を傷付ける病気を持っている【配布武器：？】》

No. 5・大前田 おおまえだ 友清 ともきよ

《太った男、オタク、コイツの言動の元ネタがわかってしまうのが

悔しい【配布武器：？】》

No. 6・勅使河原 てしがはら 社 やしろ

《前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系中二病美少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、筆談なので俺は無視してる

【配布武器：？】》

No. 7・水茂 みなも めぐみ

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる【配布武器：？】》

No. 8・深見 ふかみ 柁 まさき

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした男：だよな？【配布武器：？】》

No. 9・織笠 おりかさ 未娘 みこ

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、なのに俺はタメ口されてる【配布武器：？】》

No・10・赤松 慶二 あかまつ けいじ

《ヤンキー、沸点がかなり低いのかキレやすい【配布武器：？】》

No・11・国崎 瑞穂 くにさき みずほ

《言動が病んでる、脇差し、笹錦（命名、勅使河原）を常に持ち歩

く【配布武器：脇差し】》

No・12・誹泉 伸一 ひいずみ しんいち

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、結構無口【配布武器：？

》

No・13・遼 彼方 はるか かなた

《自分の所に何書けてんだ？とりあえずリストカットで自殺して

ここに来た【配布武器：ナイフ】》

No・14・柏瀬 詩織 かしわせ しおり

《車椅子愛用な幼なじみ、テレビが壊れててルールがわからない【

配布武器：？】》

【生存者数、残り14人】

一本目【不信】

「壊れてたって…、あのテレビがか？」

「私が起きた時には壊れてたけど…そんなに重要だったの？」

…頭が痛くなつて来た。

よく漫画とかの吹き出しに出てくる表現の黒いモジャモジャを俺も出してしまっそうだ。

詩織があのだ放送を聞いていないって事は詩織の持つルールはわからないという事だ。

「もしかして…普通は壊れて無かった…り？」

そう、まさに普通は壊れて無かったりするはずだ。

「…ん？ちよつと待て、それなら何で詩織は大広間に集まる事を知つてたんだ？」

「それは織笠さんに教えて貰ったからだけど…？」

織笠…か、そういえば織笠は真っ先にナンバーが全部でいくつあるかを確認しに出てNo.14の詩織と会ったんだよね。

…だったら、詩織が目覚ます前にテレビを壊したって可能性も？

と、考えてすぐにそのアホな考えを捨てた。

まずわざわざテレビを壊すメリットがわからない。

ルールも足りなくなるし、そもそも壊すなら詩織以外のも壊すだろうし。

…となりや。

あの天鬼って奴の仕込みか、これが一番しつくり来るし。

「ルールの確認の前に…ちょっと良いか？」

『はあい？何かな遙 彼方君、何か質問かな？』

俺が手を上げると天鬼はまるで生徒を指す教師のように返して来た。

フルネームな辺り、確実に馬鹿にしてんな…。

「詩織は部屋のテレビが壊れててルールをまだ見てない」

俺のその発言は必然ながら全員に動揺を与え、皆がざわついた。

「このままじゃルールは全て埋まらない、わかるだろ」

だから俺は天鬼に本来詩織が知るはずだったルールの発表を求め。

『ふん、そうなんだ』

返って来た返事は…それだけだった。

「そうなんだって…、おい！詩織のテレビは壊れてたんだぞ？お前が用意したかは知らないが詩織の知るはずだったルールを伝えるのがスジだろう！！」

『遙 彼方君、君は一つ勘違いをしてるよ』

わざとらしい咳ばらいをし、一瞬の間を置いて。

『彼女のテレビは”壊れてた”んじゃないくて”壊された”、もちろん、僕はやってないけどね』

「なっ…！そんな事やって得する奴なんて俺達の中に居ないだろ！！」

『そんな事僕に言われても知らないよ、やった人に言うんだね』

「てめ
」

思わず拳を握りしめたがそれを天鬼に振るう訳にも行かず、唇を噛み締めた。

コイツを殴ってしまえばルールの禁止部分に触れる事になる。

『うけけけけッ！残念残念、言っとくけど僕は君達の行動には一切干渉しないよ、悪魔でもナビゲーターだからね、天鬼だけど！！』

悪魔と天鬼をかけたシャレのつもりか天鬼本人は自分で言って大爆笑していたが俺達にそんな余裕は無かった。

「…どうでしょうか？」

「どうするも何もわからないなら仕方ないでしょう…、とりあえず今はわかるルールを確認しましょう」

水茂がおどとしながら聞くと宇佐がそう答えた。

「ならば…二番目の私か、ええっと…確か」

「ちよつと待ちなさいよ！！」

榊さんが立ち上がり、自身が聞いたであろうルールを思いだそうとしている中、声を上げる人物が居た。

「…お母さん？」

日向が見上げるのは今まさに榊に待ったをかけた自分の母親である日景である。

「ええっと…日景さん？どうしたのかな？」

榊さんが戸惑ったように聞くが日景は榊さん等眼中に無いように一人を険悪な顔で睨み付けている。

「あなたは席を外すべきよ、そうよ、それが良いわ」

「…え？あたし？」

…詩織だった、言われた本人である詩織はポカンとしているが。

「なっ…、あんたは何を言ってるんだ？」

さも当然のようにそう話す日景に俺は啞然となった。

「だってあなた、自分のルールを知らない、つまり情報交換が出来ないのでしょう？交換できる物も無いのに情報だけ聞こうなんて虫が良すぎない？」

日景はニコニコの能面が張り付いたような笑みを見せる。

「それは…詩織のせいじゃないだろ、テレビが壊…、れてたのが原因だ」

一瞬、弾みで”壊された”と言いそうになった口を必死につぐみ、軌道修正といく。

これを言ってしまうえば確実に争いの種になってしまっからだ。

「っーかよ、そもそも誰がテレビを壊したんだよ？あっ？」

だがそんな思いも虚しく、赤松がギョロリと俺達を見渡した。

ざわついた嫌な空気が広がっていく。

「そもそも…本当に彼女が起きた時にテレビは壊れてたのかしら？」

「…何が言いたいんだよ？」

…今だにニコニコとした顔を止めない日景にさすがにムカついてき

た。

「彼女がルールを知った後に自分でテレビを壊して、ルールを自分だけ独占した、そうは考えられないかしら？」

「…考えられるの？」

…俺に聞いてどうすんだよ、この天然娘。

しかしこの日向の母親、面倒臭い性格してやがる。

「だからって出てけは無いだろ、詩織が出て行かないなら？」

「彼女に私の知るルールは教えないわ」

…それじゃあどっちみち詩織は日景の知るルールはわからないじゃねえか。

…カチンと来た。

「…なら俺のルールはあんたには教えねえ」

「…彼方？」

「あ、あなた何言って…」

「悪いが俺達は幼なじみでな、情報を共有しようと思っ」

幼なじみと言って何人が驚いた表情を見せた。

…そついやまだ言つてなかつたつけ？

まあ今はそれ所じゃ無いが。

「…いいわよ、でもね」

日景はニタアと笑うと首をグルリと動かし、自分の子供である日向を見た。

「この子のルールもあなた達はわからなくなるわよ」

「…え？」

さも当然のようにそう言つた日景を日向は呆然と見つめた。

「ね…日向、日向はお母さんの言う事をちゃんと聞く良い子よね」

「で、でも…」

日向がチラリと俺達の方に目線をやった。

俺達の事を気遣い、心配しているのが良くわかった。

グイッ

だがその表情は次の瞬間、悲痛なものへと変わった。

「痛っ…」

日景が…日向の髪を掴み、無理矢理自分へと顔を向けさせた。

「日向、返事は？」

「あ…う、お母…さん」

「ちょっと！あなた…何してるのよ！！」

「…母親としての教育よ、口を挟まないで欲しいわね」

「なっ…」

宇佐の言葉にさえ、日景はしれっとそう答えやがった。

日景は今もまだ日向の髪を掴み、引き上げ、離さない。

『うけけけけッ！虐待だ虐待！ドメスティック、ヴァイオレンス
！！』

天鬼がそれに合わせたようにゲタゲタと笑い転げる。

状況は最悪だった。

ルールの情報交換なんて騒ぎじゃなく、誰もがその目的を忘れていた。

いや…ただ一人。

織笠 未娘は顔色一つ変えず、動き出した。

「…織笠？」

織笠はすぐに誹泉の所へ行き、何か耳元で囁く。

誹泉もそれに頷くと。

ガァァンッ

大広間のテーブルを激しく下から蹴っ飛ばした。

さすがにひっくり返る事は無かったが誰もがその行動に動きを止め、部屋は静まり返る。

「さて…と」

そんな部屋の中、織笠は顔色も声色も変える事なく。

「榊さん、次のルールを」

榊さんにそう伝えた。

「あなた…私の話を「聞いてたわよ」「」

織笠は日景の言葉に被せるようにし、答えた。

「…いい加減、無駄な討論は止めましょう」

織笠の言葉は現状に呆れた様子でもなく、ただ淡々としていた。

「…今詩織さんをこの大広間から外に出しても後から彼方が自分の

知ってる事を全部伝えるでしょ、逆でも同じ」

確かにそうだ、詩織がルールを知る事が出来なくても俺が後で伝えるだろうし日景の場合は日向が居る。

…無駄な討論つてのはわかっていたんだ。

「だったら早くルールを把握して、討論するならそれからでも遅くないでしょう、榊さん」

「あ…うん、そうだね」

二回目の呼びかけで榊さんも完全に我に返ったのか、頷くと自分の知るルールを伝えた。

【貳・その際、自殺に使用した道具と身につけていた物が配布されます、道具の使用方法に関しては各自自由です。】

これは…、これが何を指しているのか、俺にはわかった。

ナイフでリストカットした俺に配布されたのはナイフ。

そしてタバコ。

…もっとわかりやすい例として脇差しを持ったままの国崎も居る。

つまり経緯は不明だが国崎は脇差しで”自分を刺した”のだ。

…ちょっと待て。

ゾクリとした冷たい予感が俺の頭を霞める。

ナイフで自殺したならナイフ。

なら例えばロープとかでの首吊りならロープなのだろうか？

だったら…拳銃自殺なんかだと？

拳銃…そのものが配布されたり、するのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1653y/>

リ・ライフ～天獄と14人の自殺者達～

2011年11月26日21時49分発行